

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520096

研究課題名（和文） 戦国時代における新たなランドスケープの生成

研究課題名（英文） New Views: The Revolution in Landscape Painting in Warring States Period Japan

研究代表者

高岸 輝 (TAKAGISHI AKIRA)

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・准教授

研究者番号：80416263

研究成果の概要（和文）：土佐光信は、戦国時代の初期において、実際の景観のスケッチに基づく表現を絵巻の中で行った。こうした新しい視覚に基づく絵画制作は、「洛中洛外図屏風」の成立につながる。新しい視覚の背後には、応仁の乱後における注文主たちのものの見方の変化も横たわっている。「清水寺縁起絵巻」は、乱からの復興期にあった京都にあって、平安京の遷都と同時に開創された清水寺の由来を説くが、ここには国土の中心としての首都と、その周縁としての東北のイメージが明確に表象されている。さらに、南都興福寺の京都における末寺としての清水寺の位置は、古代・中世を通じた南北両京の地理的な軸によって物語が展開する。東西・南北の地理に基づいた空間把握のありようが、新たなランドスケープの生成に大きく影響していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In the early Sengoku period, Tosa Mitsunobu depicted landscapes in hand scroll paintings that he based on sketches he made of actual landscapes. This practice represents a new way of visualizing landscapes, and is connected to the rise of rakuchūrakugaizu screens that depict panoramic scenes of the landscape in and around the capital.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：ランドスケープ、絵巻、洛中洛外図、土佐光信

1. 研究開始当初の背景

日本の中世から近世への転換期、「洛中洛外図屏風」が誕生した。これは、都市の景物を描いた屏風が出現したという意味以上に、統一的な視点から広範な景観を捉える新たな画法と新たな視覚的認識の創出を意味する。本研究では、応仁の乱（十五世紀後半）から

江戸幕府の成立（十七世紀初頭）にいたる広義の戦国時代において、景観に対する視覚的認識が変化していったことを、風景画法の変遷を主軸に据えて考察する。

応募者が本研究の構想にいたったのは、土佐光信が絵巻制作において実際の景観を前にしてスケッチを行っていた、という発見に端

を発する。光信以前の中世絵画において、現地景観をスケッチして絵を描くということは通常行われぬ。景観描写に定評のある鎌倉期の「一遍聖絵」(清浄光寺蔵)や、同時期の宮曼茶羅などには、霊地の風景が一見リアルに描かれているが、これらはある程度流布している伽藍配置等の「情報」を参照しながら再構成したものであり、絵師自身の直接的な視覚経験が画面に反映されているわけではない。これが中世的なランドスケープといえる。絵師や注文主の視野をそのまま再現したような近世的ランドスケープは、まだ要請されていなかったと考えられる。しかし、明応四年(1495)に土佐光信が描いた「槻峯寺建立修行縁起絵巻」(フリーア美術館蔵)の景観描写はまったく異なっている。絵巻冒頭の上巻第一段には、後に月峯寺(槻峯寺)が建立されることになる剣尾山の山容が描かれているが、大阪府能勢町の現地景観と比較したとき、稜線の輪郭、山壁の重なりから遠近感の表出にいたるまで、ぴったりと合致することが判明した(拙著『室町絵巻の魔力―再生と創造の中世―』、吉川弘文館、2008年)。ここに、新たなランドスケープの出現を指摘することができる。ランドスケープにおけるこうしたリアリズムの萌芽は、注文主の景観に対する認識の変化を示すものだろう。同絵巻の注文主は、摂津・丹波の守護・細川政元と考えられる。両国の境界にある剣尾山は修験の霊地であり、修験に傾倒した政元は領国支配の安定を祈念して絵巻を制作奉納したと推測される。支配地の霊峰をリアルに描くことが、絵巻の霊力を高めるために必要だったのである。明応2年(1493)に政元が発動した将軍廃立のクーデターは戦国時代の幕開けを告げるものであるが、その政元注文の絵巻にも次の時代を予感させる景観が描かれているのである。

2. 研究の目的

「ランドスケープ」とは、この認識と画法と包括する用語として使用したい。英語でランドスケープ(landscape)とは、第一義として風景や景観そのもの、そして第二義として風景画、風景画法を指す。風景画の制作とは、景観を可視的なものとして認識し、平面上に再現する行為であるが、ランドスケープという語は、この一連の過程すべてが含まれる。よって、風景画を美術品としてではなく、同時代の都市観、国土観、さらには世界観を表象するものとして捉え直すという本研究の狙いとも合致している。美術史・日本史の枠を超えて、中世から近世への転換の中で、急速に世界の認識が視覚的なものへと傾いていく様相を明らかにしたい。

3. 研究の方法

現存する中世絵巻を中心に、景観の描写を析出し、それらの変遷を追う。狭義の景観、すなわち遠景の風景だけでなく、都市内の邸宅空間や寺院の伽藍空間などについても、考察の対象とし、15世紀から16世紀にかけての表現の変化を比較する。また、絵巻の詞書に記された空間や国土の感覚についても、同時に分析を行うことで、絵画だけでなく広義のランドスケープの成立を明らかにしようとする。

4. 研究成果

以下、主要な雑誌論文、著書、および学会発表の内容に沿って記す。雑誌論文④では、「環境」をキーワードに、室町期の絵巻制作におけるランドスケープの変化を取り上げた。15世紀の初頭、応永21年(1414)ごろに成立した「融通念仏縁起絵巻」(清凉寺蔵)には、念仏の教えに共鳴する全国の社寺が、参加者の名を書き連ねた名帳に参加する場面が描かれる。横長の画面に、西は巖島神社の海上の社殿から、京都の主要な寺社、そして東は伊勢神宮に至る霊地の景観を連続的に表現した場面は、中世後期の景観表現の中でもとりわけ異彩を放っている。室町土佐派絵師の第三世代に当たる土佐行広は、他の五名の重要なやまと絵師とともに本絵巻の制作に参加し、該当する上巻第六段の場面を担当した。清凉寺本は、先行する版画による同主題作品(明德版本)を下敷きとし、これを肉筆化することによって成立したものであるため、両者の比較によって、行広が行広の先行する版本に示された全国の霊地をいかに編集し、改変したかを明確にとらえることが可能になる。このなかで、特に注目されるのが伏見稻荷の神域の描写であり、行広は清凉寺本において社殿の背後に新たに三つの頂をもつ山を書き加えている。このことによって、各地の霊地を連ねた景観の後ろに、あたかも屏風が立つように山が出現することになり、一体化した風景のように見える効果を発揮している。こうした景観としての統合に対する指向を示しつつも、15世紀初頭の段階で、行広の実景に対する関心は希薄である。稻荷山は、その特徴的な三峰で表現されているものの、実感には乏しく、絵師が活躍した京都近郊の山であるにもかかわらず行広スケッチを行った痕跡を見出すことはできない。

応仁の乱を経て、室町土佐派の第五世代として登場した土佐光信は、15世紀の末、明応四年(1495)に描いた「槻峯寺建立修行縁起絵巻」のなかで、冒頭の剣尾山の風景を現地スケッチに基づいて描いたことは、先述のとおりである。ここに至り、絵師、および注文主は、自らの目に映った風景を、忠実に再現する絵画、すなわちランドスケープの生成へと大きく舵を切ったといえる。本絵巻には、

注文主と目される細川政元の特殊な宗教的関心が含まれていることも注目に値する。図書②で執筆した「槻峯寺建立修行縁起絵巻」と修験のランドスケープ」という論考では、政元が傾倒した修験と絵巻との関係を考察した。山そのものの靈性を重視し、山中での修行によって現実的な軍事力を得ようとしていた政元にとって、修験系寺院に奉納する本絵巻に徹底して山の姿を描き続けたことは重要である。それは、冒頭のスケッチに基づく山容だけでなく、寺院の開基譚のなかで山へと入る僧侶たちの足取りそのものが、修験における山中修行と重ねあわされているようだ。

注文主の指向や、絵巻そのものに内包される地理的な感覚、それを拡大した国土観の表出という点で注目されるのは、同じく土佐光信が最晩年の永正17年(1520)ごろに描いた「清水寺縁起絵巻」(東京国立博物館蔵)である。図書③に収録される論考「清水寺縁起絵巻」の空間と国土」では、詞書内容の分析を通じて、16世紀初頭における京都の権力者や絵師たちの国土観、空間感覚に迫った。本絵巻は、洛東の名刹・清水寺の草創を述べるもので、平安初期の平安京の遷都と並行する寺院の開基と、それに対する坂上田村麻呂の援助、本尊観音の靈力による田村麻呂の蝦夷征討の成功、その後のさまざまな観音利生譚を、三十三巻に連ねた大部の絵巻である。戦国期に活躍した近衛尚通と、弟の興福寺良誉を中心に制作が企てられ、その背景には、近衛家と縁戚関係を結んだ將軍・足利義植に対する観音の加護を希求があったと推考される。伝説の將軍である坂上田村麻呂と義植を重ね、清水観音による洛中の安寧を祈る内容と解される。詞書に記された空間や方角の概念を析出すると、南北軸、および東西軸が明瞭に浮かび上がる。ここに示された南北軸とは、奈良末期から平安初期の桓武天皇によって行われた平安京遷都が大きくかわる。南都から長岡京を経て平安京へと南から北に都は遷った。これとまったく並行する形で、清水寺を開基した僧・延鎮は大和の寺院から淀川に至り、黄金の水流を遡って音羽の地にたどりつく。また、清水寺は平安京に近接していながら、南都の興福寺の末寺であり、その後の南都・北嶺の対立によって、常に攻撃対象とされている。桓武天皇による、平安京遷都に強くかわる本寺の来歴は、南北関係の中でまずは捉えることができる。一方、桓武のもう一つの大事業である蝦夷征討とも、清水寺は深く関係する。絵巻の詞書に示されるもう一つの地理軸、すなわち東西関係は、そのまま古代中世の日本における都鄙関係を象徴する。応仁の乱後、16世紀になると京都は復興を果たしていき、寺院の再興に伴って縁起絵巻の制作が流行する。16世紀初頭の

永正期、京の復興を象徴する「洛中洛外図屏風」の成立に深く関与した土佐光信は、桓武朝に遡る平安京の来歴と、国土の外枠づくりを主題とする「清水寺縁起絵巻」の制作に関与していたことになる。戦国時代における新しいランドスケープは、実景をスケッチするという絵の表現レベルだけでなく、それを必要とする京都の権力者たちのものの見方の変化、京都という都市そのものの平安遷都に遡る位置づけの再確認、都鄙関係の中での日本の枠組みの再確認という大きな流れの中に、初めて生成しえたものといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①高岸輝、「天稚彦草紙絵巻」と室町土佐派絵巻の展開、説話文学研究、査読有、46号、2011、pp. 99-110.
- ②高岸輝、「後三年合戦絵巻」の絵画をめぐる諸問題、軍記と語り物、査読有、47号、2011、pp. 23-29.
- ③高岸輝、「土佐光信のコミュニケーション—絵師と画料をめぐる—」、文学、査読無、10巻5号、2009、pp. 174-180.
- ④高岸輝、室町絵巻の環境と表現—土佐行広から土佐光信・土佐光茂へ—、日本文学、査読有、58号、2009、pp. 41-48.

[学会発表] (計8件)

- ①高岸輝、中世絵巻が内包する聖俗の力とそのかたち、日仏美術学会、日仏会館、2011年11月27日
- ②高岸輝、「酒飯論絵巻」に見られる中世絵巻の伝統と近世的革新、日本中世における文学ジャンルと視覚表象シンポジウム、フランス・パリ・パリ市立セルヌスキー美術館、2011年11月5日
- ③高岸輝、交差する縁起絵巻と仏教絵画、日本の視覚文化—芸能・メディア・テキスト—シンポジウム、米国・ニューヨーク・コロンビア大学、2011年9月16日
- ④高岸輝、「怪異学」と「絵巻学」の交差—室町絵巻と絵師の怪異—、東アジア怪異学会、京都大学東京オフィス、2011年1月22日
- ⑤高岸輝、やまと絵における古典の復興と再生、国際シンポジウム「近世やまと絵再考」、国際文化会館、2010年12月28日
- ⑥高岸輝、海外所蔵の室町土佐派絵巻について、説話文学会、学習院女子大学、2010
- ⑦高岸輝、「後三年合戦絵」の絵画様式と中世合戦絵巻の系譜、軍記・語り物研究会、大学コンソーシアムあきたカレッジプラザ、2010年8月29日
- ⑧高岸輝、芸術家と工房組織の経営—日本中

世とイタリアルネサンス期の比較から一、経営行動科学学会、東京工業大学、2009年11月8日

〔図書〕(計5件)

- ①高岸輝, 他、論集・東洋日本美術史と現場
一見つめる・守る・伝える、竹林舎、2012、
担当 pp. 170-180.
- ②高岸輝, 他、修験道の室町文化、岩田書院、
2011、担当 pp. 179-200.
- ③高岸輝, 他、中世絵画のマトリックス、青
簡舎、2011、担当 pp. 349-360.
- ④高岸輝, 他、王朝文学と物語絵 平安文学
と隣接諸学 10、竹林舎、2010、担当
pp. 75-90.
- ⑤高岸輝, 他、イメージとパトロン—美術史
を学ぶための23章、ブリュッケ、2009、
担当 pp. 119-132.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高岸 輝 (TAKAGISHI AKIRA)
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・
准教授
研究者番号：80416063

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：